

令和 2 年 6 月 12 日現在

機関番号：33920

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2019

課題番号：16K16001

研究課題名(和文) 発達障害を疑われた外国人未就学児と親のための療育支援モデルの検討

研究課題名(英文) Examination of a support model for foreign parents with preschoolers suspected of developmental disorders

研究代表者

駒田 いずみ(浅野いずみ)(KOMADA, Izumi)

愛知医科大学・看護学部・講師

研究者番号：80643494

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：発達障害の未就学児をもつ外国人の母親が支援を継続して受けるには、子どもの特性を不安と捉え、母親にある程度の日本語能力があることが条件として考えられた。未就学のブラジル人の発達障害児を育てる母親が求める支援は、日本の保健医療福祉制度や教育体制の情報、診断前の子どもの状態について理解を示す姿勢、母国語で子どもについて話ができる存在であった。このことから、発達障害児を育てるブラジル人の母親を対象に、日本の母子保健・福祉サービス、障害児教育、同じ障害の児をもつ母親と交流ができる内容で、母親を対象とした支援モデルを作成し試行した。母親からはモデルの継続実施の希望があり好評であった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、未就学の発達障害児を育てるブラジル人の母親が継続して支援を受けられる要因を明らかにすることができた。今後も日本にて育児をする外国人は増加することが想定され、人口増加と共に発達に何らかの心配がある児や発達障害児の増加も見込まれる。本研究でブラジル人に有効な支援モデルを開発したことで、ブラジル人の多い市町村において同様の内容でプログラムを実施することができる。また、今回の研究は、未就学の発達障害児を育てるブラジル人の母親の語りから、望む支援について気持ちやその変化を分析し、継続して支援を受けるための要因を明らかにしたことは意義がある。

研究成果の概要(英文)：Those foreign mothers with developmentally disordered preschoolers who were able to continue to receive support tended to feel concerned about their children's conditions and to have some Japanese ability. Brazilian mothers raising children with developmental disorders were found to be in need of 1) information on Japanese health care, welfare, and education, 2) professionals who show a sound understanding of their children's problems, and 3) peers with whom they can share their concerns in their native language. Accordingly, we developed and tested a support model for Brazilian mothers with developmentally disordered children, providing them with information on health care, welfare, and education and with opportunities to interact with peers with similar problems. The model was well-received and the mothers hoped for continued implementation.

研究分野：地域看護学・国際看護学

キーワード：発達障害児 在留外国人 未就学児 保健師 ピア 療育支援

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

日本における外国人登録者数は年々増加傾向で、研究代表者が居住する愛知県においては日本で2番目に外国人登録者が多い県である。研究代表者は愛知県A市において、効果的な母子保健・子育て支援における情報提供の在り方を模索する研究に参加し(基盤研究(C)、課題番号24593463)、A市で市民グループと協働して外国人の親子が気軽に集うことができる「多文化子育て支援事業」を試行し、ブラジル人やペルー人ら親子と接してきた。多文化子育て支援事業に参加している未就学児と接した経験から、児が何らかの障害を有していることでの反応なのか、外国人ということでの言葉や文化・価値観の差によって生じている反応なのか判断がつかねる児が多い印象を持っていた。更に発達障害を疑われた幼児をもつペルー人の母親より療育について相談を受けた経験もあり、在留外国人の発達障害を疑われる児をもつ保護者からは今後の育児に不安を感じていたり、相談先がわからなかったり、また相談機関につながっても継続的に支援を受けていけない状況があることが予想された。在留外国人母子の増加とともに、発達障害を疑われる外国人の子どもの増加も予測されるが、その支援については明らかにされていない。言葉の壁や文化・価値観の違いから必要な支援が受けられず、家庭内・学校内で問題を抱えている外国人の子どもの生活上、学業上の困難が考えられるが、発達障害を疑われる外国人の未就学児を対象とした研究は見当たらない。

そこで、発達障害を疑われるブラジル人の就学前の児とその保護者が納得して保健指導を受け入れ、安心して継続的に支援を受けられるための条件について検証したいと考えた。

2. 研究の目的

- (1) 発達障害児及び発達障害を疑われるブラジル人の未就学児と親で、療育支援が継続している事例と、必要な支援からドロップアウトした事例について検証する。継続的な支援を提供するための共通項及び支援途中でドロップアウトした事例の共通項を見出す。
- (2) 発達障害児及び発達障害を疑われるブラジル人の未就学児を育てる親の心情を明らかにする。
- (3) 発達障害児及び発達障害を疑われるブラジル人の未就学児を育てる親が必要な支援を継続して受けられることができる療育支援モデルの開発を行う。

3. 研究の方法

(1) 半構成的面接調査の実施

愛知県内で外国人登録者数が多い2市において、健診事後教室や個別支援等を通して発達障害を疑われるブラジル人の未就学児及びその親の支援を経験した保健師2名を対象に半構成的面接調査を実施した。

未就学の発達障害児を育てるブラジル人の母親8名を対象に、育児支援者への思いや望むサポート等について、半構成的面接調査を実施した。

保健師への調査で得られた内容から継続して支援が実施できた事例の共通項と、ドロップアウトした事例の共通項を明らかにした。

母親への調査で得られた内容から、育児支援者への思い、望むサポートについてなど、継続して支援が受けられている要因について分析し、必要な支援内容を検討した。

(2) 療育支援モデル(案)の作成と専門家パネルの実施

日頃より療育支援に従事する専門職3名と、日本で子育てをするブラジル人の母親1名に参加いただき、作成した療育支援モデル(案)について、意見を頂いた。頂いた意見を基に、モデルを修正した。

(3)研究協力及び参加同意の得られた、未就学の発達障害児を育てるブラジル人の母親8名を対象に療育支援モデルを試行し、その実用性を検証した。

4. 研究成果

(1)保健師の支援を継続し受けている事例の共通項

子どもの特徴の捉え方

保健センターで必要な支援を継続的に受けることが出来ている母親は、子どもの特性（多動、言葉が話さない、視線が合わない等）を子どもの個性として肯定的に捉えるよりも、不安材料として捉えていた。母親が子どもの発達状況に強く不安を持っていたことから、保健師が提案する支援を受け入れ、少しでも子どもの状態に良い変化が出ることを願い、継続して保健サービスを受けていることがわかった。

コミュニケーションが問題なくとれる日本語能力

母親は、保健師や周囲の日本人と意思疎通がスムーズに出来る程度の日本語能力があることで、子どもの状態や療育の必要性の説明について理解ができ、保健サービスを安心して継続して受けることにつながっていた。

(2)途中で支援からドロップアウトした事例の共通項

日本語でのコミュニケーションが困難

日本語を学習する機会が全くなく来日している母親が多いため、かろうじて挨拶はできてもそれ以上の日本語の理解は困難であり、母国語(ポルトガル語)以外でのコミュニケーションは出来ないことから、保健師の説明が理解できないでいた。大まかな内容は理解できても、細かい話までは理解することが困難なことから子どもの状態を正しく認識できていないと思われる母親もいた。また、保健サービスにつながっても、周囲が日本人ばかりのため、コミュニケーションがとれないことから通訳者が参加しない場所への参加は拒否的や様子がみられていた。

子どもの個性として肯定的に認識

子どもの特性について、多動に関しては活発で元気がある子という認識で捉えていた。言葉が出ないことについては家ではポルトガル語、外では日本語で自分たち両親が会話しているという環境による影響のため、言葉の発達が遅いという捉え方をしていた。母親は自分の子どもに障害があるという認識がないため、保健師の説明を受入れられないでおり、そのことから、必要な支援にも繋がらない状況であった。

今後の生活拠点を母国に移す可能性による影響

子どもに何らかの障害があることを認識してはいるものの、就学前後にブラジルへ帰国予定のため、帰国後より療育を受けようと考えており、今、日本で療育を受ける必要性を感じていなかった。

余裕のない生活

もともと母親たちは日本には、仕事をするための出稼ぎ目的で来日している方が多い。そのため、仕事をしている母親も多く、子どものことまで手が回らない状況がみられた。

(3)母親が望む支援

日本の保健医療福祉制度についての説明

母語が異なり、保健・福祉・医療の制度もよくわからない日本で情報を集め、子どもに必要な療育を受けさせなければならないことや、保健医療職から具体的な指示がないことで不安を感じたり、途方にくれている状況にあることが分かった。

早期の診断、子どもの状態について理解を示す姿勢

母親は診断前、子どもの発達・状態に違和感を持っているのに、なかなか診断がつかないこと

への不満をもっていた。また、周囲の専門職や友人らに、子どもの状態を理解してもらえず、母親の不安に対し理解のない対応をされていたことでの辛さがみられていた。

母国語で子どもについて話ができる存在

母国から離れて生活しているため、子どもの障害のことを安心して話すことが出来る家族や友達などが身近にはおらず、誰にも吐き出せず一人で抱え込んでしまう人もいた。一方で、子どもの障害について理解を示してくれる人、母国語で相談できる人の存在により、母親の気持ちは前向きに変化していた。

成長にあわせた情報

未就学児であり、今後、就学先を選択しなければならない時期が近づいてきているが、日本の教育体制について知らず、子どもをどこに入学させるべきか、どんな選択ができるのかについての情報を持っていないため、就学先について検討できない状況にいた。

(4)療育支援モデルの検討

母親の望む支援と、保健師の支援を継続し受けている事例の共通項、途中で支援からドロップアウトした事例の共通項を検討し、在留ブラジル人で未就学児の発達障害児をもつ母親のためのモデルを検討した。

療育支援モデルの概要

安心して質問や意見交換ができるよう、通訳者も参加し以下の内容を実施した。

回	内容
1回目	・アンケートの実施 ・情報提供:日本の母子保健サービス、障害児支援体制、療育手帳 ・提供者:保健師、相談支援専門員 ・個別相談(希望者)
2回目	・講話:日本で生活する上で使えるサービス・制度 ・個別相談(希望者)
3回目	・先輩ママによる体験談の紹介 ・意見交換:先輩ママの話聞いての感想 ・個別相談(希望者)
4回目	・講話:日本の障害児の教育 ・講師:保健師 ・個別相談(希望者)
5回目	・話し合い ・テーマ:目指すべき母親像、どんな母親になりたいか目標設定、プログラム参加しての自身の変化や思い等 ・アンケートの実施

(5)療育支援モデルの試行

研究協力への同意がとれたブラジル人で未就学児の発達障害児を育てる母親 8 人を対象に実施した。全 5 回参加した者は 6 人で、4 回参加した者が 2 人であった。欠席した者は個人的事情であり、本プログラムへの不満足によるものではなかった。

(6)療育支援モデルの実用性の検証

第 1 回目に尋ねた本プログラムへの参加理由については、ほぼ全員が「このプログラムに参加して、自分が知らない日本のサービスの情報を知りたい」と述べた。第 1 回目のプログラム開始前は、母親からは緊張感が感じられたが、回を重ねるにつれて、開始前に参加者同士で話し込む姿が見られ、プログラム実施中も参加者同士で会話が盛り上がる様子が度々見られた。特に先輩ママの講話があった第 3 回目は、プログラムの時間が終了し解散した後も、先輩ママと参加者の会話が盛り上がり、会場を出た後にも駐車場で先輩ママと話し込む参加者の姿が見

られた。第5回目は初回の雰囲気とは違い、非常に和らいだ雰囲気であり、研究者がなげかける各質問に対して隣同士で意見交換している様子がみられた。

今回のモデルを肯定しつつも、「教室(モデル)の実施間隔はあき過ぎない方がよい」、「日本語でもいいので配布資料が欲しかった」、「教室(モデル)に夫も参加できると良かった」という意見が述べられていた。

本モデルの課題としては、「教室(モデル)参加後も子どもに変化がなかった」、「モデル(教室)参加後も子どもへの対応に変化がなかった」という意見があった。また、「子どもに将来、大学へ進学して欲しいという願いがある」、「兄弟ともに障害児のため心配」、「子どもにまったく友達がおらず悲しい」、「子どもが保育園で安定しているので、就学後が心配である」という思いが述べられ、参加後も個々の母親に課題が残されている様子が示された。

「この教室(モデル)を継続して欲しい」という希望が多く参加者からみられ、全体として、本モデルはブラジル人の母親から受け入れられ、好評であった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 浅野 いずみ
2. 発表標題 発達障害児を育てるブラジル人の母親のトランジションプロセスに関する研究
3. 学会等名 中部M-GTA研究会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	柳澤 理子 (Yanagisawa Satoko) (30310618)	愛知県立大学・看護学部・教授 (23901)	
研究分担者	坂本 真理子 (Sakamoto Mariko) (70285237)	愛知医科大学・看護学部・教授 (33920)	